南の国のナデシコ税理士

成功へのキセキ

第46回 迷ったら、登れ！

6歳の男の子が、お父さんと一緒に五頭連山で行方不明になった、というニュース。多くの人が無事に発見されることを願っていたと思いますが、残念なことに最悪の結果となってしまいました。心からお二人のご冥福を、お祈りいたします。

このニュースが衝撃的だったのは、この五頭連山が標高1,000メートルに満たない「近所の低山」だったからです。単に標高が低いというだけでなく、小学生が遠足で行く、初心者向きの登りやすい登山ルートもたくさんある山だったようです。実際、この親子もふらっと散歩に行くような気軽さで山に入り、道に迷ったから野宿すると、携帯電話で家族に連絡しているぐらいです。

午後2時ごろから登山を始めたこと、食料やGPSレシーバーなど、最低限の装備を持って行かなかったことなど、軽率さを責める声もありますが、おそらくこのお父さんにとっては、子どもの頃から慣れ親しんだ馴染みの山、ちょこっと行って、帰って来る程度の遊び場の一つだったのではないでしょうか。

きちんと登山届けを提出していることから考えても、ネットで言われているほど、山をナメていたとは思えないのです。

それでも、不幸な偶然と判断ミスが重なると、ハイキングレベルの山でも生命を落としてしまう可能性があるという事。その事実に、がく然としてしまいました。

私は3年前から、戸沢財団の活動の一環として、月に一度のペースで、児童養護施設の子どもたちと一緒に、八ヶ岳山麓の低山で登山をしています。

さまざまな事情で、親と暮らせない子どもたち。私たちは幼い頃から、それとは気付かないうちに、親から「存在しているだけで愛おしい」というメッセージをもらって育ちます。親から愛されることで、私たちは自分自身を愛することができるようになるのです。辛いことがあってもがんばれるのは、親を悲しませたくない、親から褒められたいという気持ちが無意識のうちに働くからではないかと思います。

不幸にして、そういう経験をすることが出来なかった子どもたちに、「世の中には、信頼できる大人もいるんだなー」と思ってもらいたい。自分には、いつも味方をしてくれる大人がいるんだと、思ってもらいたい。そんな気持ちで始めたのが、八ヶ岳自然教室です。

彼らは、施設以外の友だちの家に遊びに行ったり、学校の友だちを施設に呼んだりすることが、なかなか出来ません。夏休みに、親と一緒にキャンプに出かけた記憶などない子どもたちが、ほとんどです。

「今まで生きてきた中で、今日が一番楽しかった」、そう言ってくれた6年生の子どももいました。

だから、この活動は体力の許す限り、続けていきたいのですが、「子どもたちを連れて山に登る」リスクについては、以前から、心に引っかかっていました。

児童養護施設には、原則として3歳から18歳までの子どもたちが暮らしています。おとなしい子、体力のない子もいれば、いっときもジッとしていられない子どももいます。

一方、引率する大人たちはというと、施設の職員さんたちは、20代から30代の方が多いので体力もありますが、財団側の人間は、年齢も高め（汗）のメンバーばかり。険しい山道を駆け上がる子どもたちには、こちらがついていけません。山に連れて行ったつもりが、子どもたちから「原さーん、頑張って～」と、励まされる始末です。

これまでは幸い、何事もありませんでしたが、それは単に運が良かっただけ。五頭連山の親子の遭難事故を聞いて、そんな不安が頭をよぎりました。なぜなら私自身、事故のあったまさに同じころ、プチ道迷いを体験したからです。

山の遭難事故の4割は、道迷いが原因です。そして道迷いは、登るときよりも下山のとき、そして標高の高い有名な山よりも、低い近所の山で起きやすいと言われています。

近所の山だと道がはっきりしません

標高が高くても、有名な山は登山道がしっかり作ってあるし、分岐点には標識も必ず設置されているからです。しかし、近所の低山ではそうはいきません。観光客で賑わう人気の山なら、たくさんの人が歩くので登山道がはっきりしていますが、あまり人のこない近所の山だと、そもそもどこが登山道かがよく分かりません。しかも低山だと、林業の人や山菜採りの人が歩いた跡などが残っていて道らしく見えるため、なおさら迷いやすいということも、今回の件で知りました。

その日は、八ヶ岳山麓の天女山（標高1,530メートル）から前三ツ頭（標高2,364メートル）まで、標高差約800メートルの行程です。

朝10時半ごろ天女山の駐車場を出発し、頂上では、ウィンナーとキャベツを炒めてホットドッグをペロリ。360度のパノラマを堪能してから下山を開始しました。

登山、とくに急こう配の山は、登りよりも下りの方がずっと大変です。急な岩場は乾いていて滑りやすく、おしりですべった方が早いぐらいでした。子どもたちはぴょんぴょんと軽快に降りていきますが、ジャンプのできない私が、必然的に後方になってしまいます。

標高1,900メートルぐらいまで下ると、それまでの岩場は姿を消し、傾斜も緩くなって、がぜん歩きやすい土の道になりました。木々の間から木漏れ日がさし、耳をすませば、キツツキやシジュウカラの鳴き声も聞こえます。

「そっちにも道あるの？」

突然、頭の上から声がしました。最後尾にいたメンバーが、声をかけてくれたのです。正直なところ、分かりにくい道だなーと思い始めてはいたのですが、いま歩いている道が間違っているとは夢にも思いませんでした。ひたすら真っすぐに歩いていただけ…のつもりだったのです。

「道がないなら、こっちに上がってこないとダメだよ」

見上げると、灌木の間に、鮮やかなブルーのジャンパーがかすかに見えます。直線距離にして5～60メートル離れていた程度でしょうか。しかし、私のいた場所から、ブルーのジャンパーの場所までは、がけの傾斜が45度はあると思われ、とても登っていける気がしません。下っているとばかり思った道は、途中から登りになっていたのです。

「ここ、登れそうもないよ」。「じゃあ、来た道を戻っておいで」

振り返ると、灌木の間にいま通ってきた「道」が、はるかに続きます。下ってきたということは、また登って戻らなければなりません。ブルーのジャンパーはそのまま、先に行ってしまい、あっという間に視界から消えてしまいました。私はものすごい不安感に襲われながら、来た道を引き返し、分岐点と思われる場所まで戻りました。

前三ツ頭からの絶景

そこでもう一度確認しましたが、はっきり間違えたと言えるほど、正しい道は明確ではありませんでした。来たときの記憶をたどり、小さな塚のようなものが小高い稜線に建っていたのを思い出し、登っていくと、確かに見覚えのある景色が…。

おそらくは、私が鮮やかな赤のヤッケを着ていたので、道を外れて林の中を歩く姿に気づいてくれたのだと思います。もし一人で歩いていたら、または地味な色の服を着ていたら、道なき道を歩き続け、そのまま迷っていたかもしれません。

「道に迷ったら、上に登れ」。これは登山の常識なのだそうです。上に登れば、頂上は一つしかないので、必ず登山道に戻れるからというのが、その理由です。

五頭連山で遭難した親子のニュースにふれ、今では頭に叩き込まれたフレーズですが、当時はそんなことすら知りませんでした。また山中では、携帯電話がすぐに電池切れになってしまうので、消費を抑えるために機内モードにしておくべきという知識もありませんでした。

夏がくると、ボランティアで子どもを登山に連れていく人も多いのではないでしょうか。寒い山の中で生命をおとした親子のご冥福を祈るとともに、二人の死をムダにしないためにも、教訓として肝に銘じたいと、心から思います。

◆筆者 原 尚美（はら なおみ）プロフィール

税理士。東京外国語大学卒業。TACの全日本答練（現：全国公開模試）「財務諸表論」「法人税法」で全国1位の成績を収め、税理士試験に合格。直後に出産。育児と両立させるため、1日3時間だけの会計事務所からスタートし、現在は全員女性のスタッフ約30名の規模にまで成長。一部上場企業の子会社やグローバル企業の日本子会社などをクライアントにもつ。ミャンマーに会計サービスの会社を設立し、海外進出支援にも力を入れている。著書に『小さな会社のための総務・経理の仕事がわかる本』『小さな起業のファイナンス』（いずれもソーテック社）、『51の質問に答えるだけですぐできる「事業計画書」のつくり方（日本実業出版社）』『トコトンわかる株式会社のつくり方（新星出版社）』『世界一ラクにできる確定申告（技術評論社）』『一生食っていくための士業の営業術（中経出版）』など。その他、「経理ウーマン」「デイの経営と運営」など雑誌への寄稿や、商工会議所、中小企業投資育成株式会社、日本政策金融公庫などでの、セミナー実績も多数。

マイナンバー対応

最新 小さな会社の総務・経理の仕事がわかる本

原 尚美 著、吉田 秀子 著（ソーテック社）　1,400円+税

総務・経理の仕事…すべてをできるようになるには、とても時間がかかります。
大きな会社に入社しても、小さな会社に入社しても、たくさんのことを覚えなくてはなりません。
そんなとき一番困るのが、必要書類がわからない、書類の書き方がわからないといったことです。
本書は、必要な書類とその書類の書き方の注意点のサンプルをできる限り掲載しています。
総務・経理のしごとに携わるすべての人に読んで、参考にして頂きたい本です。